



同じ目標目指す「地学好き」に出会える

「先生！ 今度、地オリメンバーで『砂金甲子園』に出たい！」。突然の生徒からの提案。それは14年前に「地学オリンピックに出たい！」という提案以来の驚かされるうれしい出来事でした。

神戸女学院で「地学」を担当し始めた15年前の私は、右も左も分かりませんでした。しかし慣れてくると、フィールドワークをしたくなり、月食観測会や鉱物採集の企画などを定例化してきました。思い返せば、この時期の「地学好き」は教員とだけつながっていました。

大きく変わったきっかけは二つ。14年前から少しずつ増えてきていた本校のオリンピック参加者の中から2021年と22年に日本代表に選ばれたこと。もう一つはコロナ禍をきっかけに、学校公認でオ

ンライングループをつくれるようになったことです。21年につくった「地学オリンピック同好会」（現在は「有志地学研究会」に改名）では、オリンピックだけでなく、今

検や天体観測など地学系イベントの発信を一本化。本校の「地学好き」のための連絡サイトを作りました。ほぼ同時に日本代表が出たこともあり、会員数はうなぎ上りに増えていきました（現在は16

人をと全校生の約5分の1）。そんな中、「地学好き」がつながり出して初めて起きた化学反応が冒頭の発言でした。こうして「砂金甲子園」では学年



生徒からの提案で参加した「砂金甲子園」。準優勝に輝いた

6人と全校生の約5分の1）。そんな中、「地学好き」がつながり出して初めて起きた化学反応が冒頭の発言でした。こうして「砂金甲子園」では学年

「先生！ 今度いつ空いていますか？ オリンピックの問題で質問があるんですけど」。私の元へ付箋をいっぱい付けて聞きにくる生徒たちに、これからも寄り添っていきたいと思います。
（飴村尚起・神戸女学院中高部地学科教諭）

を超えた12人で出場し、初出場にもかかわらず準優勝することができました。